

和蘭攻城法

完

洋学文庫  
文庫8  
C289



松宮觀山學論云。北條安房守氏長奉特旨。詔江毛之兵法。江毛之貢士由利安菴。留于東都凡三年。多談士數輩。日夕會談。戰法及火術。究其甚區奧。下畧

勝保氏曰菴書



攻城何蘭陀申里安卒相傳

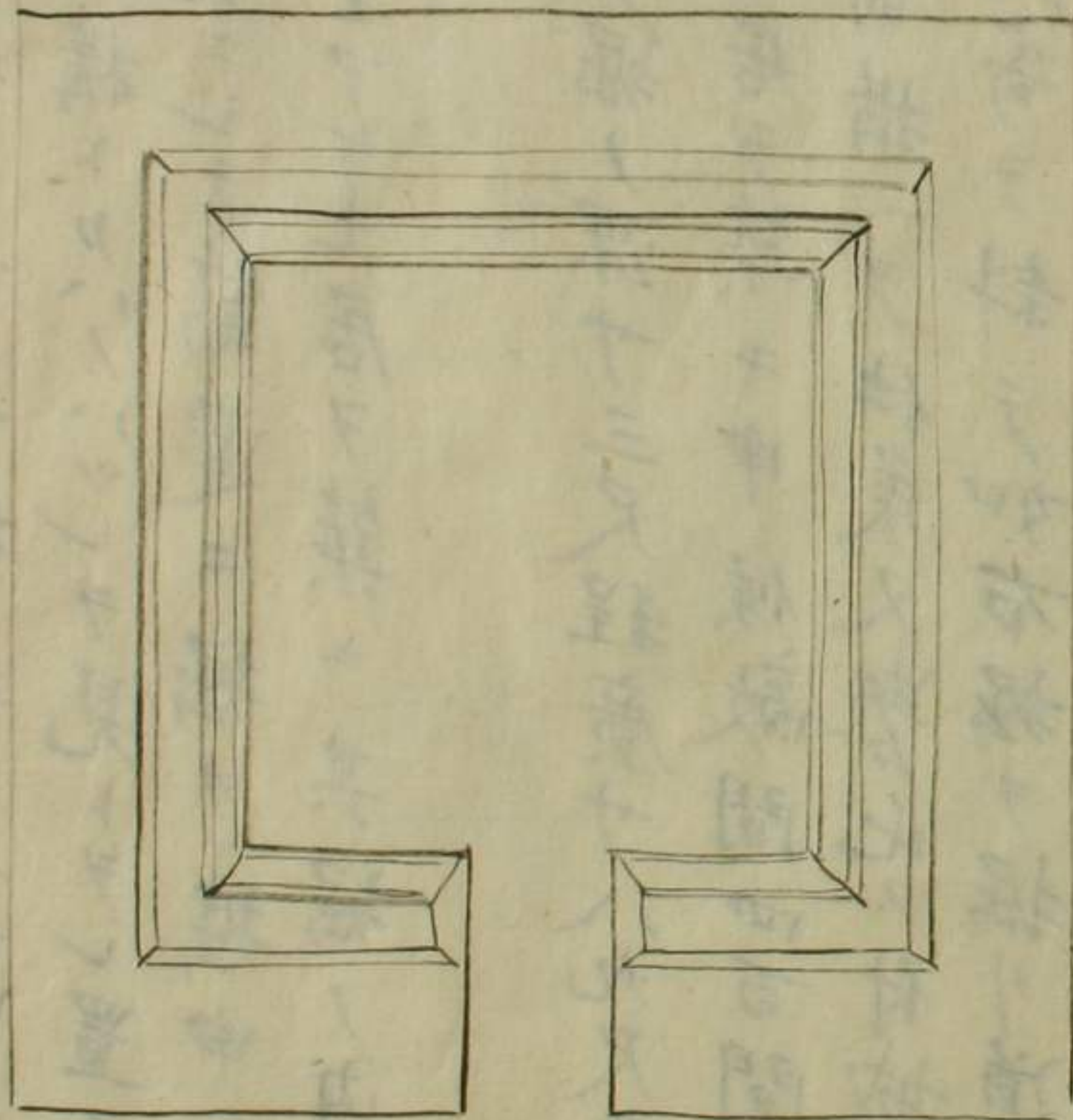
城ヲ攻ルニハ先ツ遠々ト取寄セ遠卷ニ堀ヲ堀  
處々ニ陣屋ヲ掛ケテ要害ヲ構ヘ人数ヲ置キ  
後攻ヲ抑止扱城ヲ攻ル役人ハ為寄ヲ附ケ城ヲ  
攻申候也為寄ノ普請スルコト何レモ足輕鐵  
砲ノ者ニテ御座候ニツニ分ケ半分ハ合戦ヲ持  
テ半分ハ普請ヲ仕候也

為寄之作法

為寄ヲ附ルニハ先ツ城ヨリ石火筋ノ不届程ノ  
處ニ陣着其後城ヨリ六百間ハカリ置キ勢ヒ

ヲニツホト構へ申候様子、後虎口日本陣城  
 付城ノ内ニ小屋ノナキモノニテ御座候三十間四方  
 四十間十六七間四方人数ノ多少ニヨリ申候廻リ  
 ニ掘ヲ掘リ其土ヲアケ土居ヲ築キ申候高サ  
 八九尺或ハ二間ハカリナリ土居敷二間上ノ廣サ  
 一間四尺

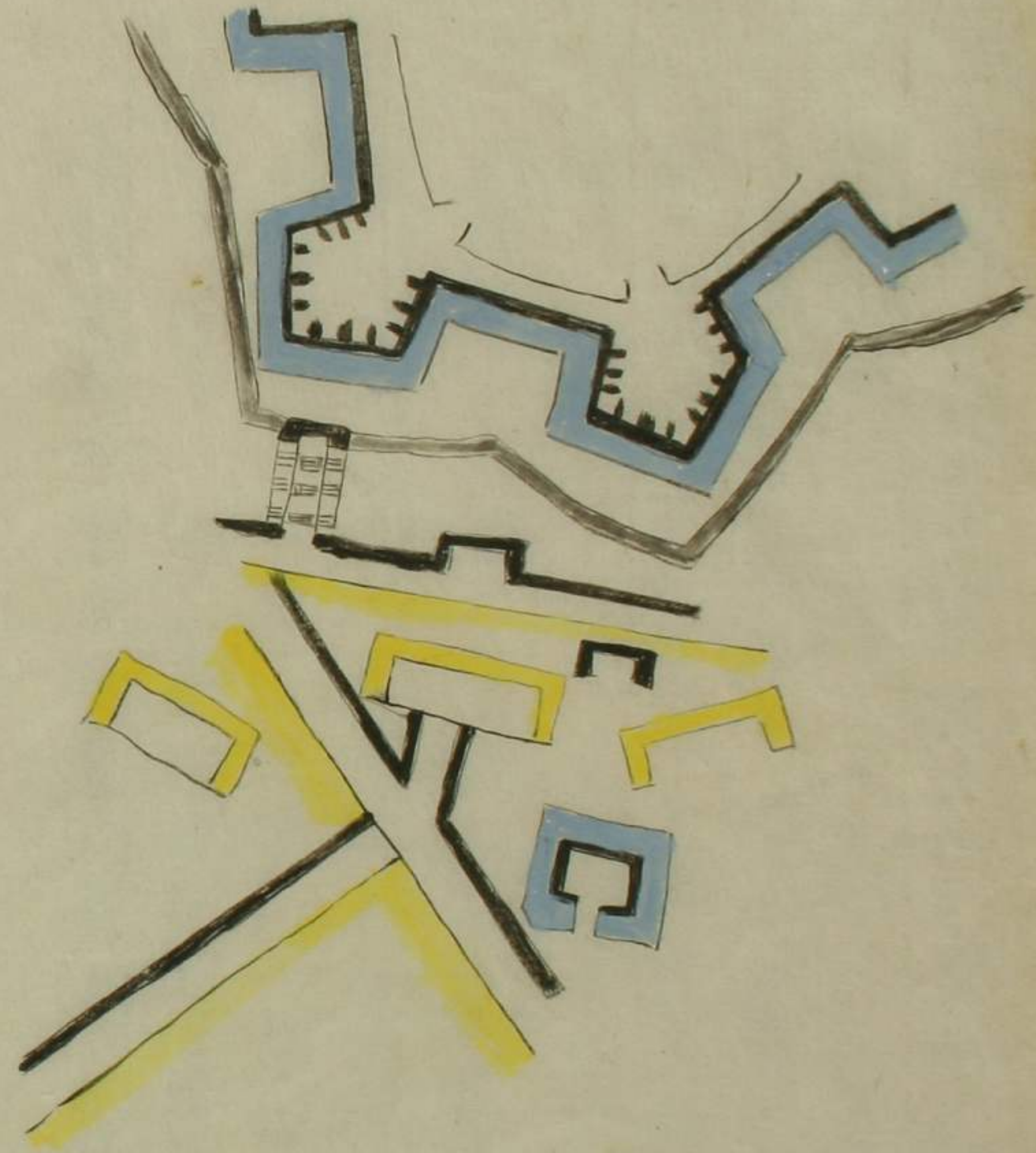
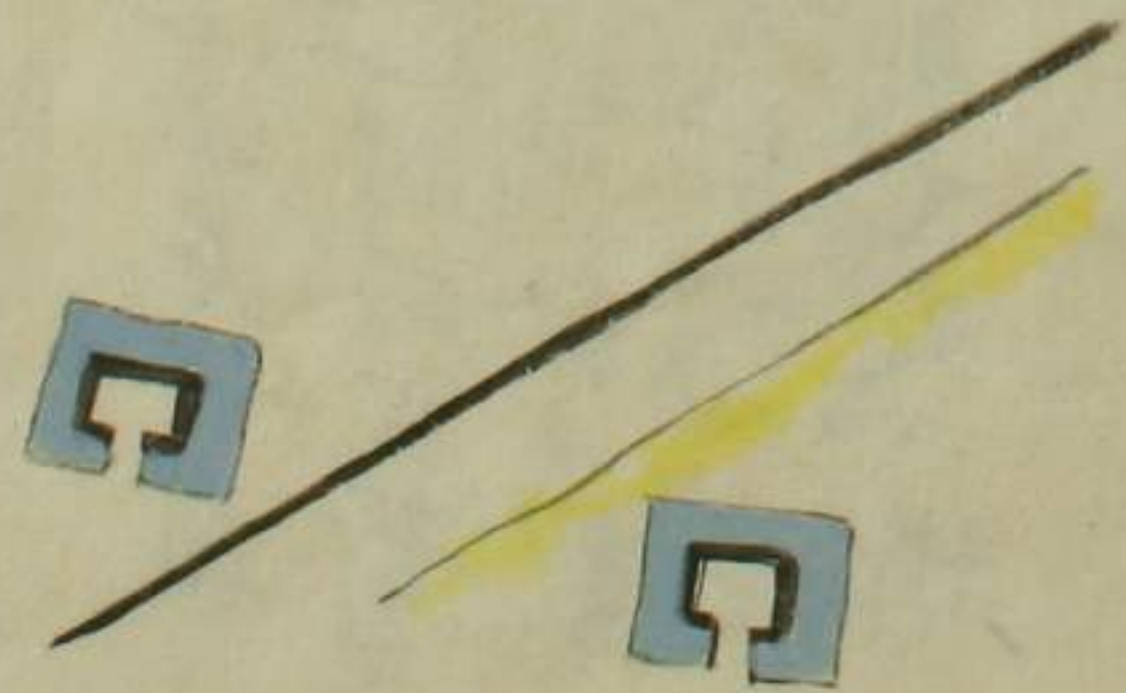
勢屯之圖



一 為寄ノ堀ヲ可堀様ハ先ツ晝町見ノ南針ヲ以テ總構トカハノハツレヲ見トヲシ置テ夜其南針ヲ定規ニシテ筋違ニ堀ヲ堀申候其土ヲ城ノ方エアケ土居ヲ築キ其堀ノ内ヲ道ニ仕候

一 為寄ノ堀ノ深サ三尺程廣サ八九尺ニモ二間ニモ其土ニテ土居ヲ築キ申候敵間四百間程ニナレハ石火箭構ヘテ仕候又執力此ノ付城ヲモ致シ是ヨリ為寄ヲ斜テ如右堀ヲ掘リ道ヲ附ケ申候如何程モ如此ニ仕候我朝ノ攻城竹々

八道ヲ附ルコトク仕候

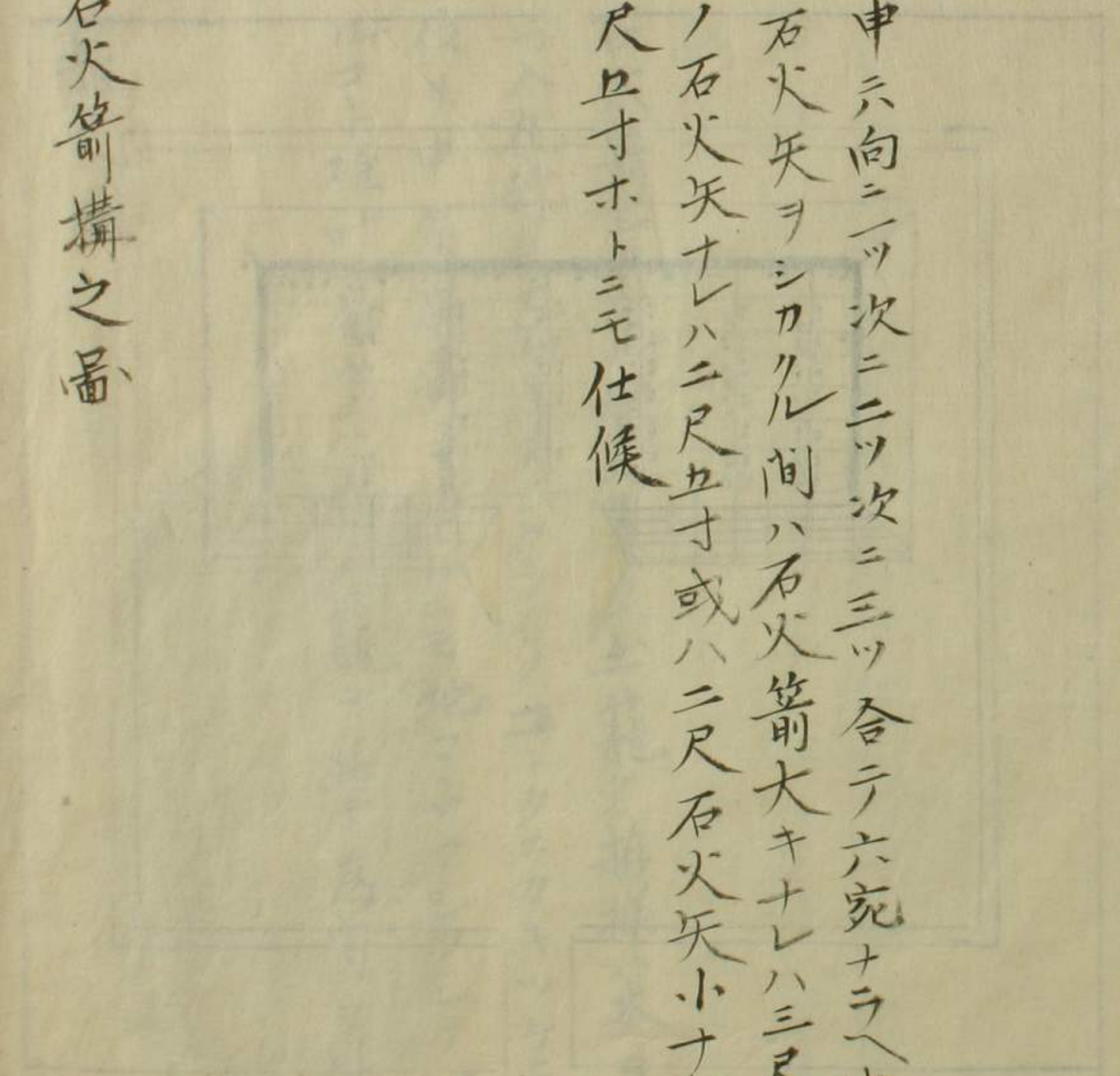


一 敵間四百間程ニナレハ石火箭構ヲ仕候石火箭  
構ノ高サハ敵城ノ石火箭構ノ半分程ノ高サ  
ニ致シ候横ノ廣サハ石火箭ノ数次第筒ヲ並ル間  
二間或ハ二間半三間前後ハ八間九間或ハ十間ニ  
モ仕候

一 廻リニ堀ヲ掘リ其土ニテ地形ヲイタシ土居ヲ築  
申候後ノ方ハシカラミヲカキ丈夫ニ致シ候石火箭  
ノモトリ強シテ土居崩ルル御座候上ニ板ヲ敷  
キ向ニ土籠ヲ並其間ヨリ石火箭ヲシカケ申候  
土カコハ向ニツ其内ニツナラベ申候丈夫ニ構

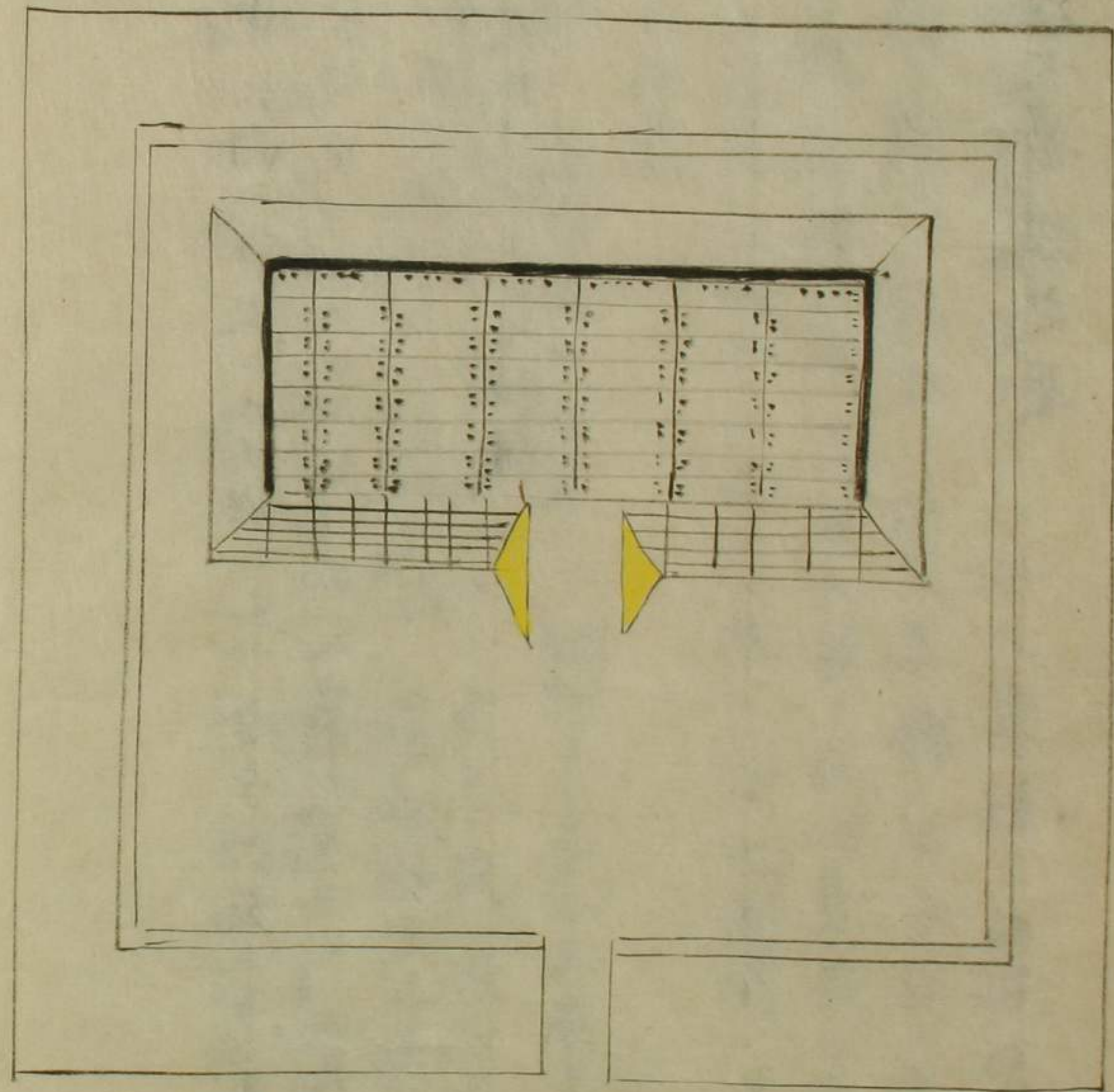
申六向ニツ次ニツ次ニ三ツ合テ六宛ナラハ申候  
石火矢ヲシカクル間ハ石火箭大キナレハ三尺常  
ノ石火矢ナレハ二尺五寸或ハ二尺石火矢小ナレハ  
尺五寸ホトニモ仕候

石火箭構之番

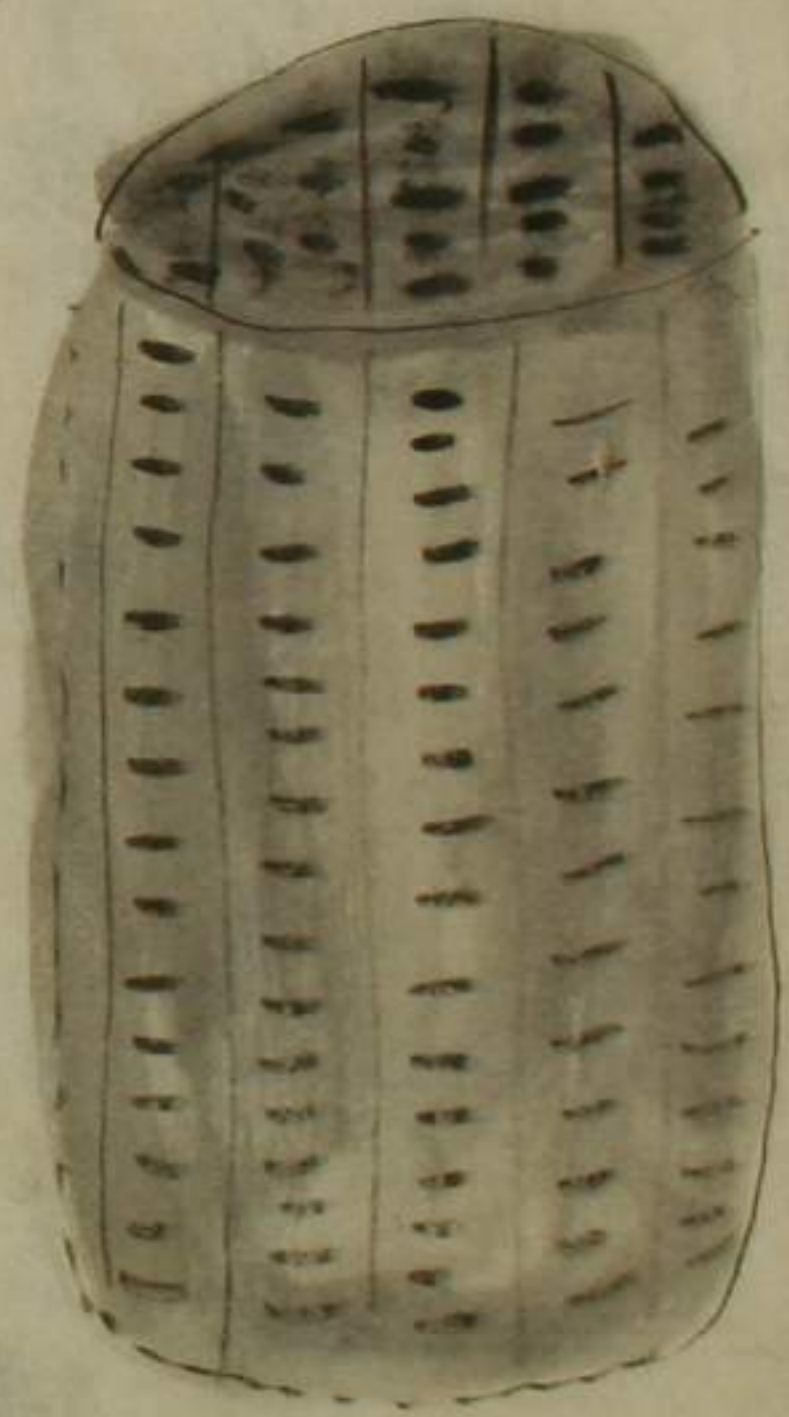


籠之圖

一 石火箭シカクル間ニ置ク土籠ノ拵様ハ木ヲタテ  
 ニ八九竹ヲヒシキテシカラミノユトクニカキツケテ籠  
 依リ申候為寄ヲ附ルニモ地コソアシクシテ堀ヲ掘  
 ルコト难叶處々ニ右ノ籠ヲ並テ為寄ヲ仕候



一 石火矢構ハ敵城ノ石火矢構ヲ心ヲツケテ敵城  
 ヨリ石火矢放スコトノチラヌ様ニウケヒシキ心安ク  
 味方ノ人数ニ為寄ヲイタサセ候様ニ構ニ申候  
 一 城近ク為寄レハ石火矢ヲ可放構ヲモ仕候是  
 ハ又石火矢構トハカハリ申候廻リニ堀ヲ掘リ其

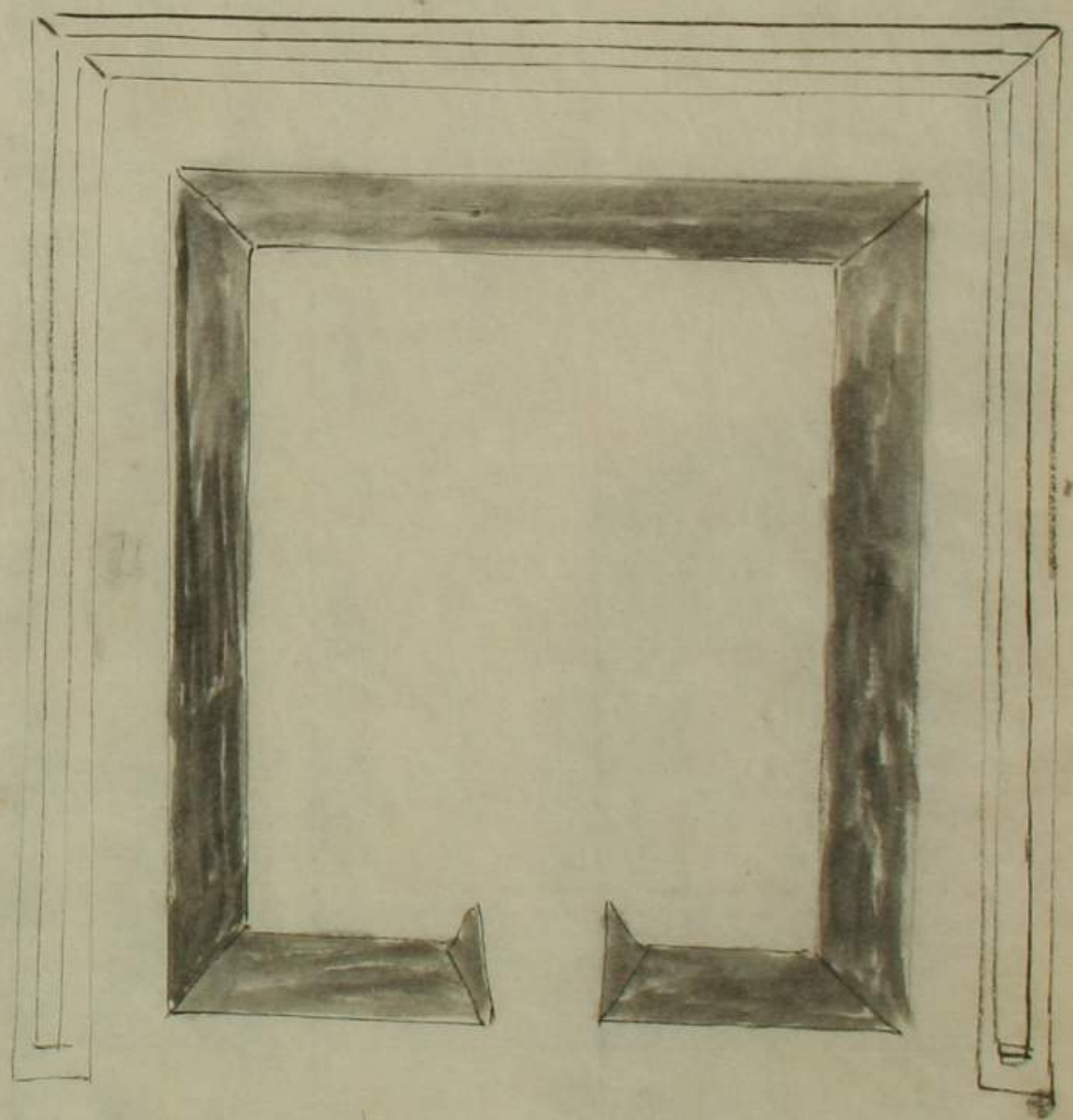


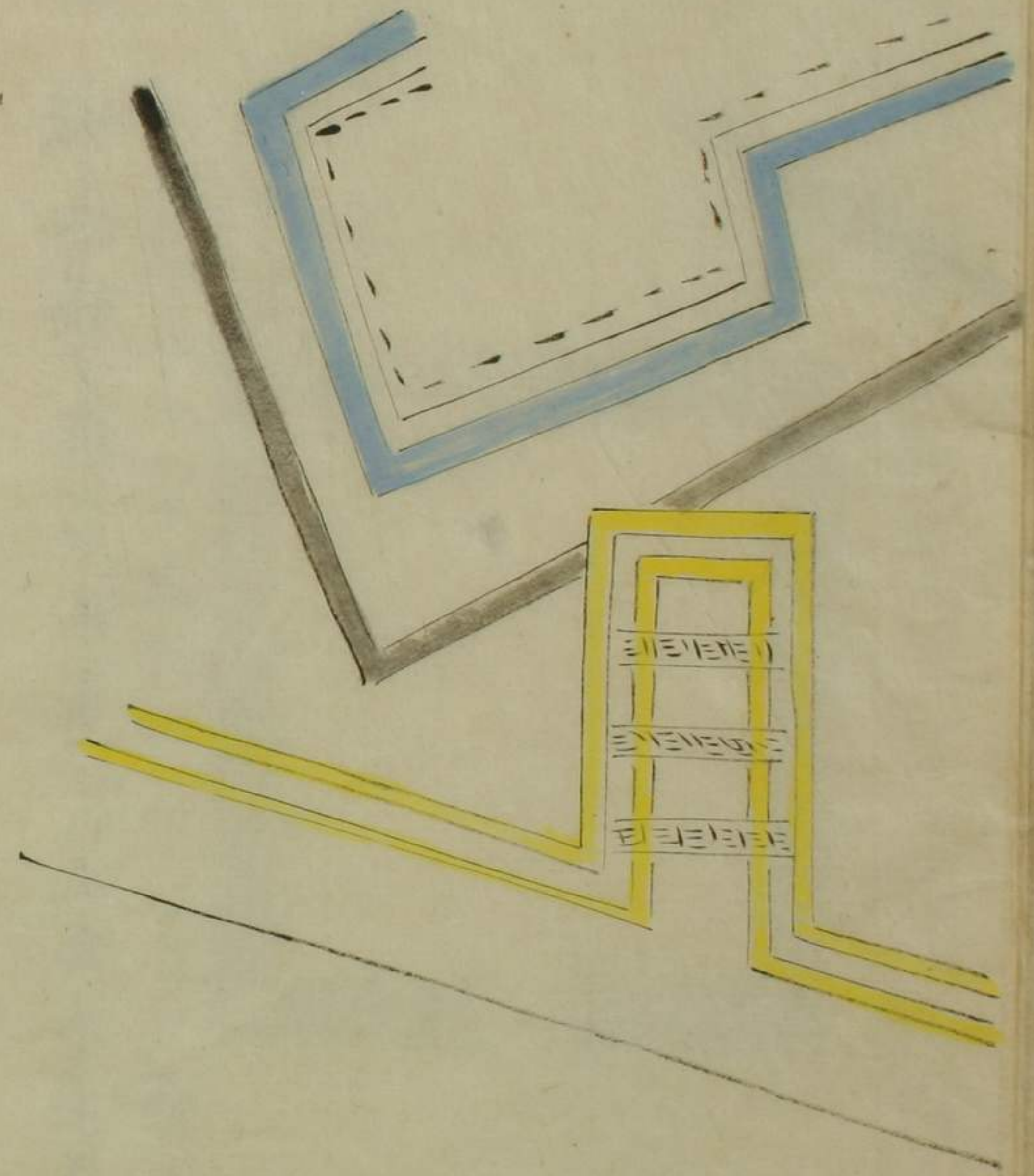
土ニテ土居ヲ築構ノ内ヲモ元ニ掘テ其中ヨリ  
 玉石火矢ヲ放シ出ス様ニ仕候玉石火矢構トシレハ  
 敵ヨリモ情ヲ出シ石火矢ヲ放シカケ是ヲヤフコト  
 イタシ候コトニ構ニ入念ヲ入申候

玉石火矢構之圖



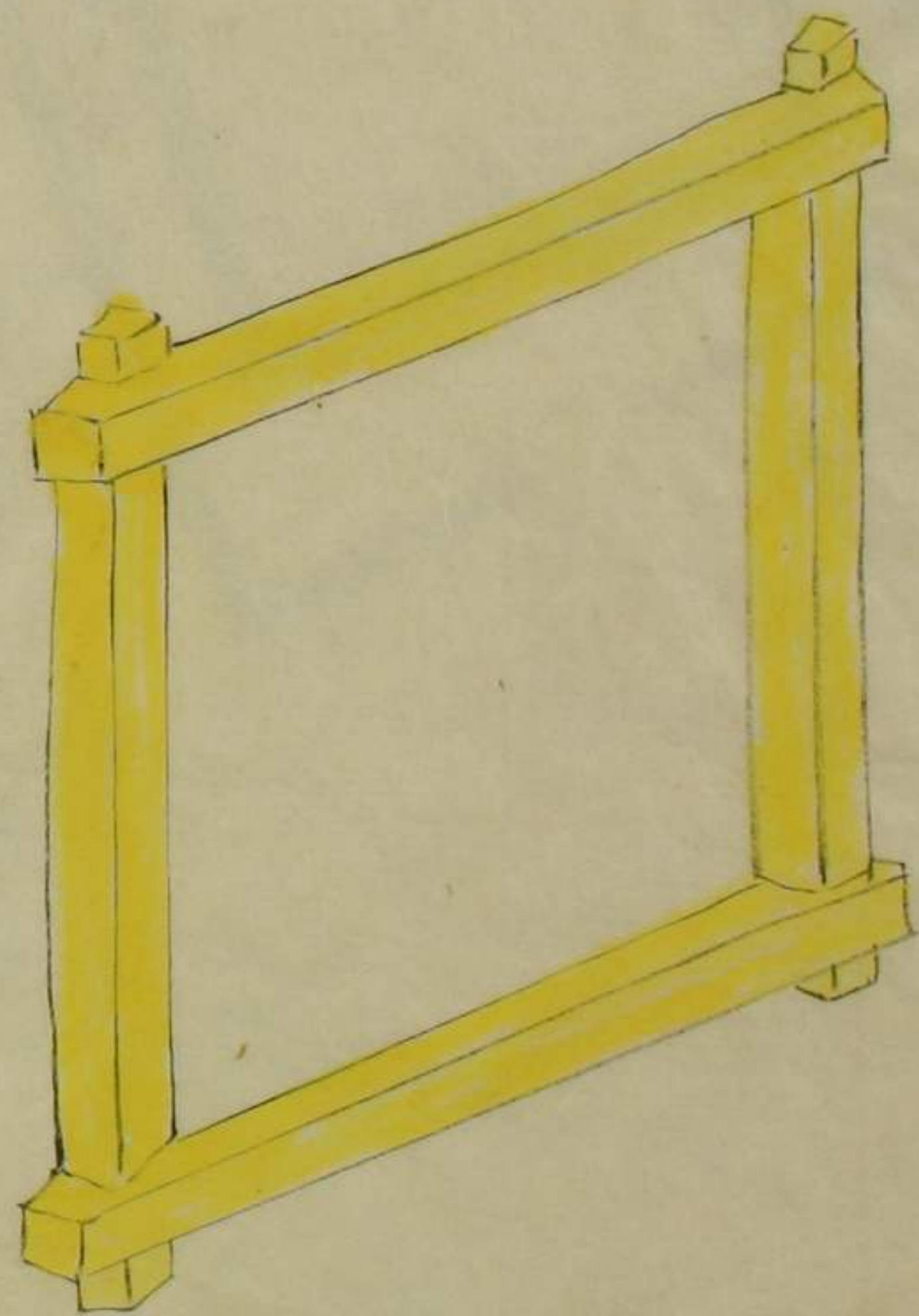
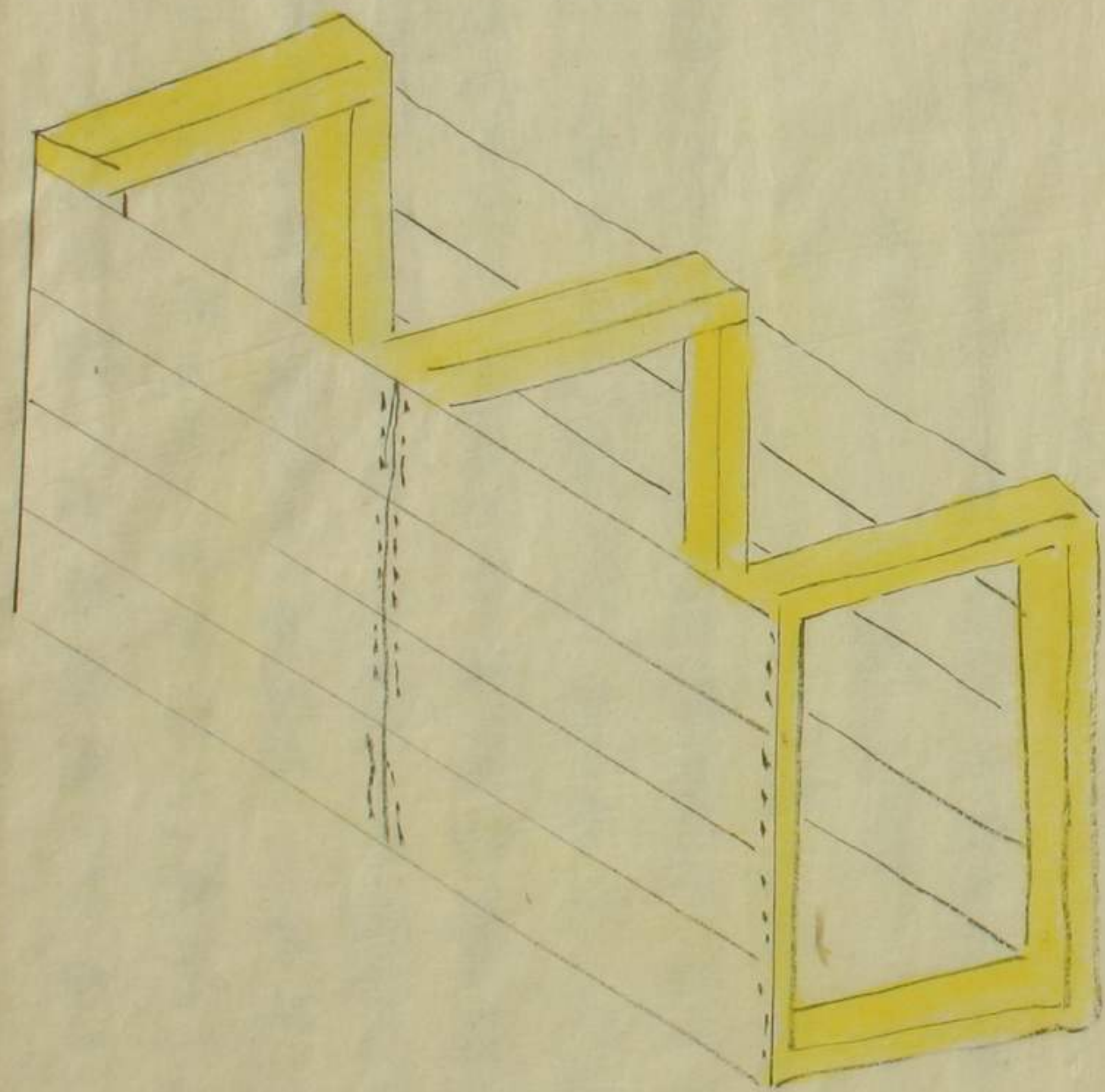
一 城ノ總構ノ際ニテ為寄テハ又左右ニ土居ヲ築  
キ其上ニ竹タハヲ並其内ヨリシヨリテ堀（土ヲ入  
埋申候





一 堀ノ内エ入テハ四寸五寸ハカリノ角木ヲマスカタニナ  
 シテソレヲ一間程宛ニ並へ板ヲウケテ其内ヲ通り  
 為寄申候

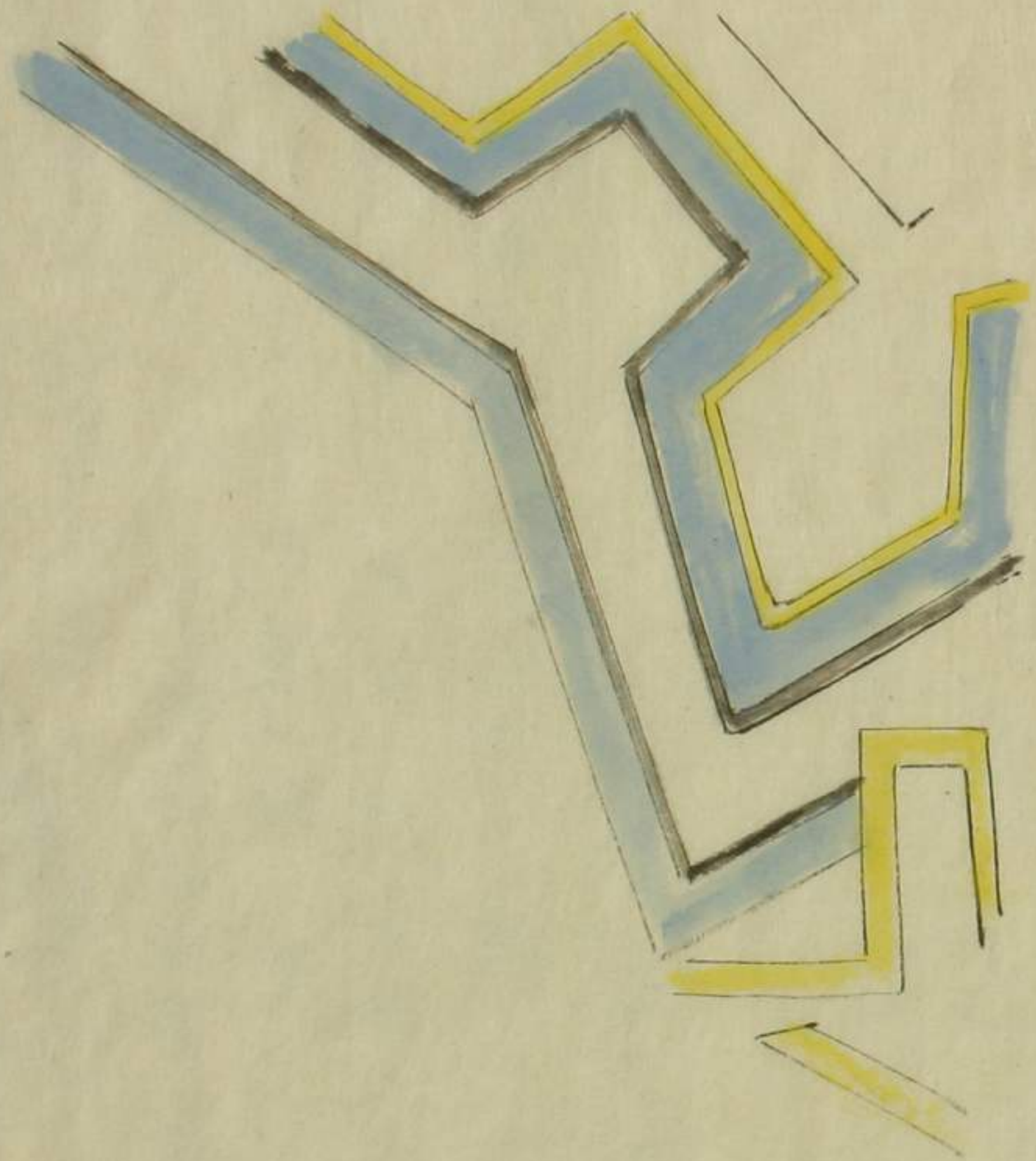
圖



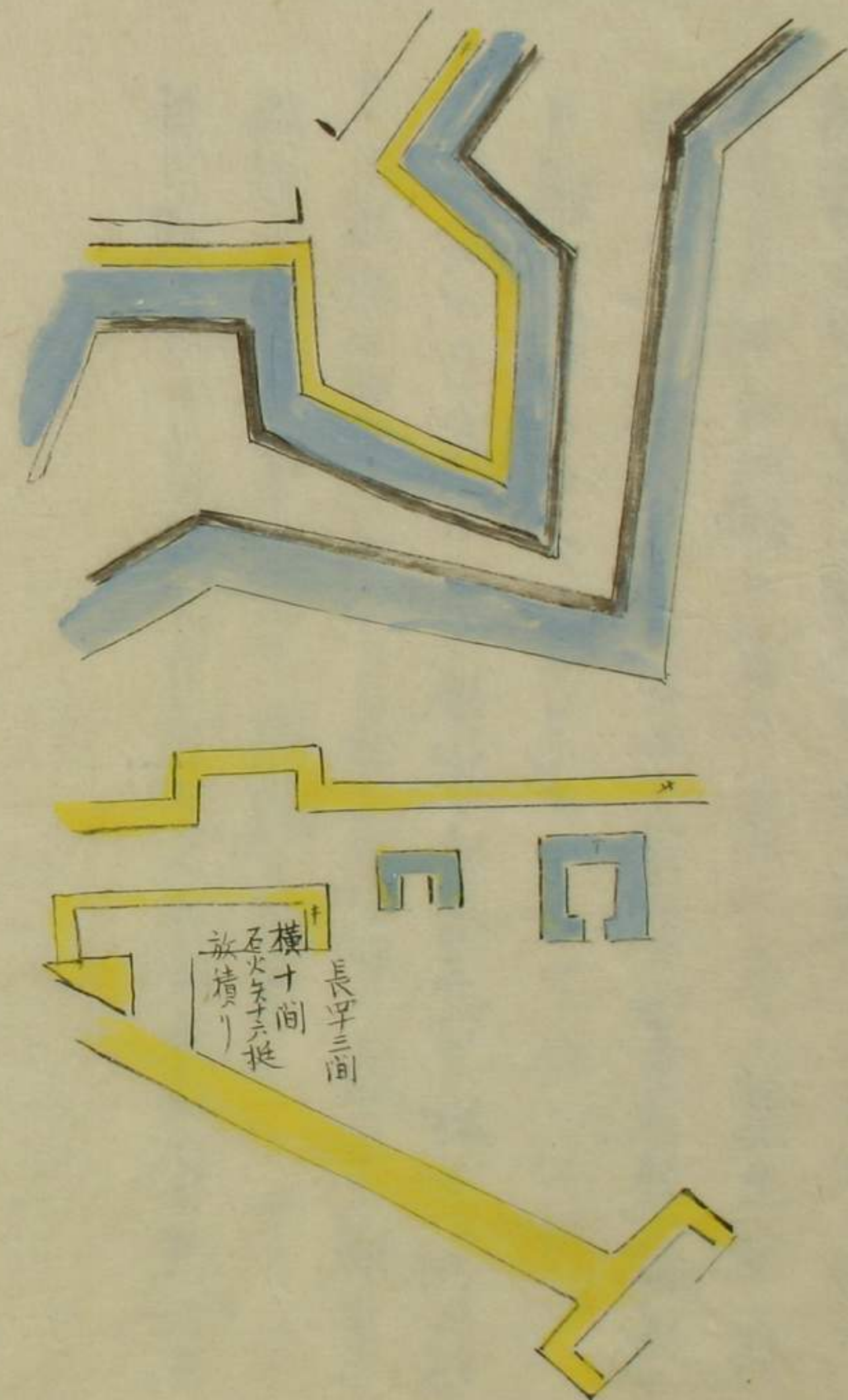
九

一 敵城ノ石火矢構ノ石垣堅固ニシテ唯ヤフリカ  
タキトキハ味方ノ石火矢ノ如何程モ一所エヨセ一処ヲ  
子ライ一度ニ放セハ堅固ナル石垣モクツレ申候一放シニ  
テ崩レサレハ如何程モ崩ルホト放シ申候拍子ヲソロ  
エ一度ニ不放レハ不崩ユエニ能其約束ヲ定幾挺  
ノ石火矢ナリトモ一度ニ火ヲサシ申様ニ仕候  
石垣崩レテモ城ノ石火矢構堅固ナレハ其マノリ  
トルコトナリカタシ然ルトキハ穴ヲ掘リ城ノ石火矢  
構ノ中エ入其穴ノ内ニ鑊砲ノ菜ヲ入クキヲフ  
サキクキ菜ノ通ヲシテサリテ火ヲ放シ申候

一 藁ノ積ハ千斤モ二千斤モ或ハ三千斤モ入小キ石火  
矢構ナレハ六七百斤ニテモ崩レ申候  
一 穴ノ堀様ハ曲折シテホリ申候如何ニモ忍テ城中ヨ  
リ不知ヤウニホルヘシ城中ノ者はヲ知レハ向ヒ堀  
ヲ掘テ藁ヲヌスミトリ申候  
一 藁ヲハ坑ノ内ニウチユホシテ置キ申候然レトイソ  
カワレキ時カ心地アレケレハ箱ナカラモ置キ申候  
時モフタヲハトリテカ(リ)申候

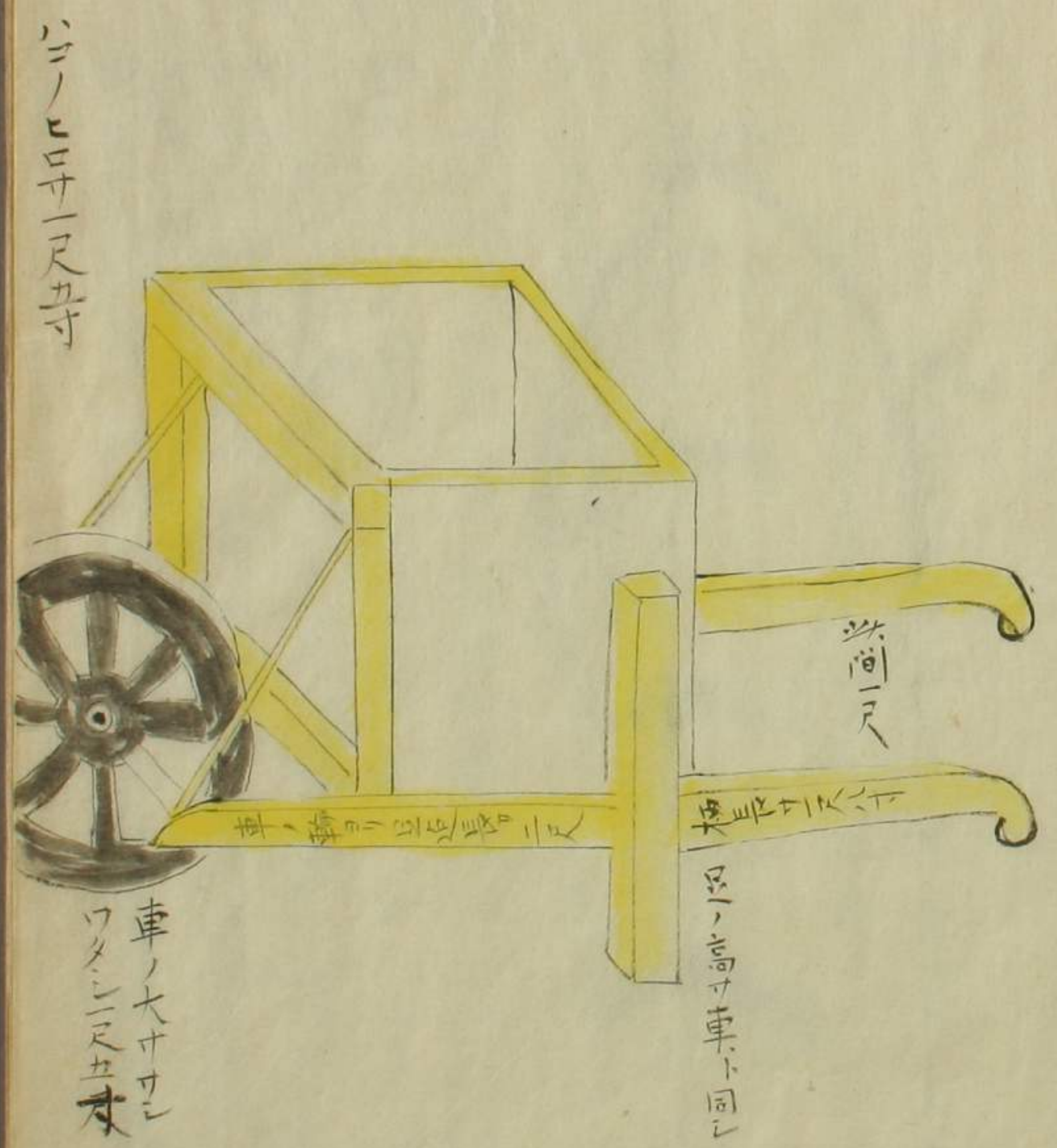


圖



長平三間  
横十間  
石火三六挺  
放積

一 普請ノ道具 鋤 鉄ツルノハシノ類ハ日本ノ道具ニ  
 カワリ不申候其ニカレイタト云モノ御座候是ハ  
 ホヲハコブモノニテ御座候日本ニテ用申モツカウ  
 ノ代ニツカシ申候一輪ノ車 上ニ箱ヲイタシ申  
 入一人シテヲ申候一度ニ四五人シテ持ホト申  
 候輪ヲ先ニシテ推行申候



一 ラント申道具是ハ日本ノトウツキノコトクニテ御座候地形ヲナラシ其上ヲツキ申候カク木ニテ作之鉄ノタガヲカケ申候四人ニテ持申候

圖

カク木ニテツキ申候ノタガヲカケルニ



此木ハカク木ト云フニカクニタメシキテ  
 籠ノコトクニシヨクナリ

一 右ノコトクシテ城ノ升形ヲヤフリ申候時ハ内ヨリモ  
 フシニテ致ニシサリテ防キ申候其時ハコナタヨリモ  
 又構ヲコレラテ敵ヒトリカヘサレ又様ニ仕候  
 一 城ヲ守ル作法ハ先ツ敵ヲ寄ルト聞ケハ玉葉ヲ  
 調ヘ石火矢構ニ人数ヲクハリ敵ノ為寄ヲ待申候  
 卒余ニ城ヨリ出不申候但シ敵ニヨリヲツクルトキハ人  
 数ヲ出シ小筒ヲ以テ為寄ノ敵ヲ拂ヒ申フモ御座候  
 右ノ外ハ石火矢構ヨリ石火箭ヲ放シ或ハ玉石火矢  
 ヲ以テ敵ヲ防キ申フ肝要ニ仕候  
 一 城形ハ六角ニ仕候角々ニ石火矢構ヲ致候我ノ

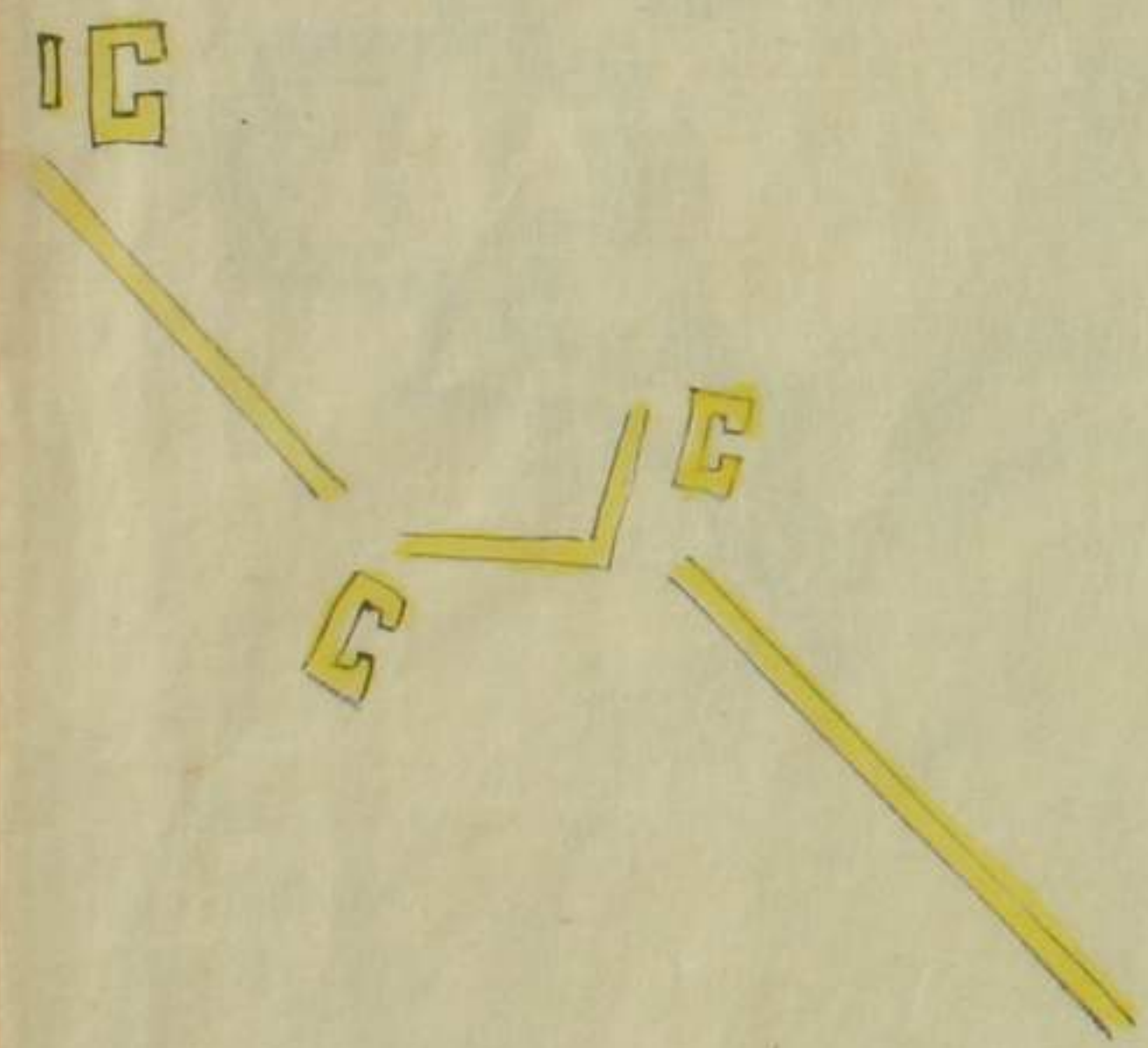
出ニ升形ノコトク仕候又腰廓ヲイタシ水堀ヲ掘  
外ニ總構ノ土居ヲツキ申候掘ノ方ヲ切岸ニ向ノ  
方ヲナダラニ築申候敵ノカサシニテ又ヤウニ仕ト  
見エ申候敵近ク為寄トキハ城内ノ家ヲコボテ土  
居ノ際エヨリ小屋ヲ掛ケ居申候内ニ碁盤ノ目ノ  
コトクニ穴ヲイタツモ掘申候是ハ子石火矢ヲ防リ手  
段仕候穴ノ内ニテ玉ヲハ子マセ申時ハ廣崩不申候  
敵石垣ノ際ニテ為寄レハ穴ヲホリテ城中エ入石火  
矢臺ノ下エ薬ヲ入火ヲサシハ子クヅサセ申候此  
ツマキニ城中ニモ其役人ヲ定メ晝夜心ヲシツ

ノ臂ヲ枕トシテ居是ヲ聞申候穴ヲ掘レハ其響キ  
ニテ石ヲチ申候

一 敵穴ヲ掘入ラハ味方ヨリモ亦ムカヒホリヲ掘テ防  
之敵ノ薬ヲ入ルヲ取申候

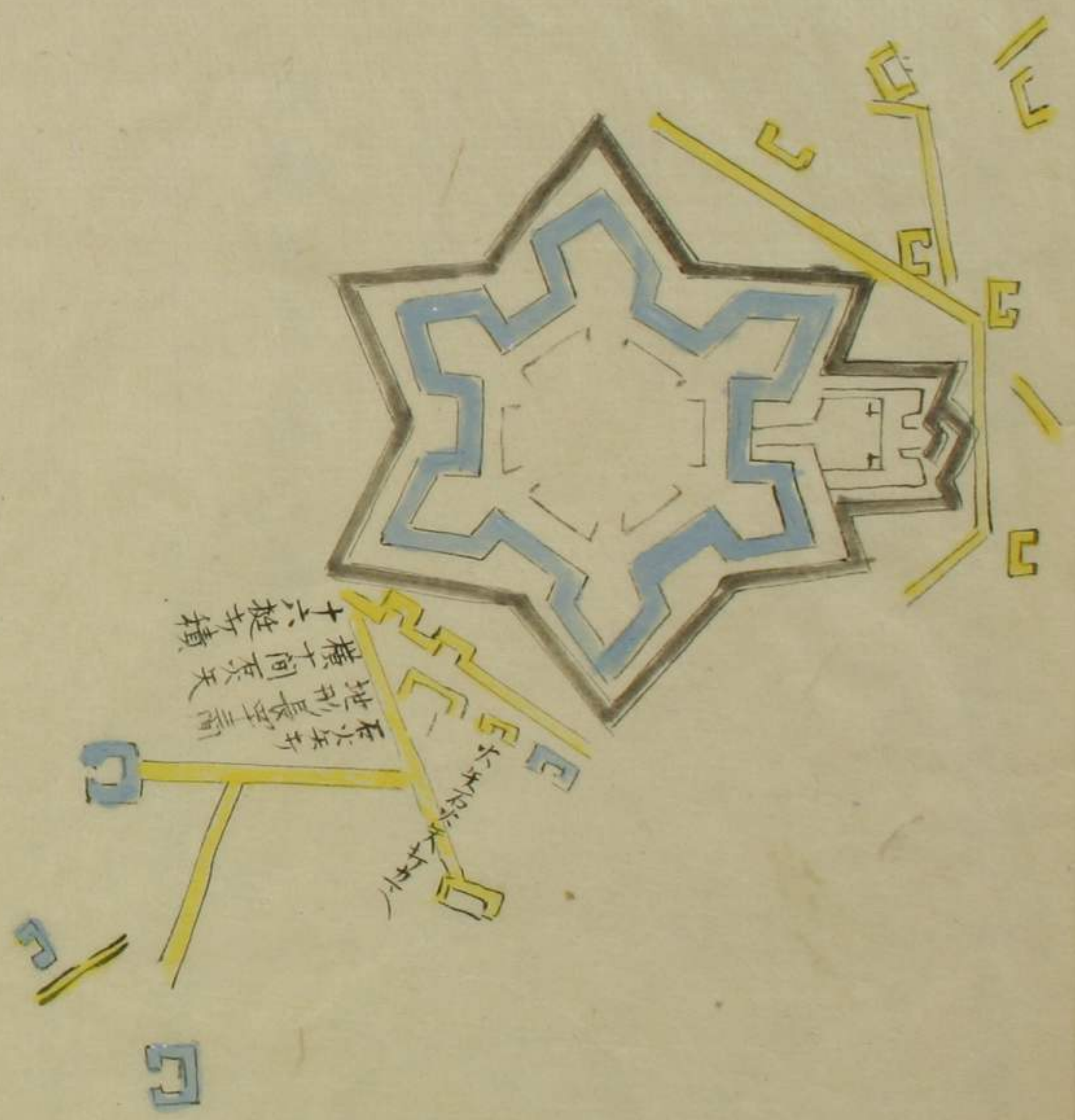
一 城ヲ守ル法ムカシハサマノ仕候エトモ近年ハ子玉石  
火矢出来テヨリ何レモ用ニ立不申候右ノ外別ニ致  
シ様ナシト申候コトニ数ノ石火矢ニテウタル時ハ必落  
城仕候但城内ニ穴ヲ掘上ニ木ヲ渡シ土ヲ二三尺ホト  
カケ候工ハ数ノ玉ニテモ人ノ損スルコトハ無御座候工  
トモ穴ヨリ外へ出テ敵ヲ防フナラ子ハ為高ニテヤ





城構並為寄之圖

フウレ申候故トカク落城仕ル由申候



右次生子  
 地引長空箭  
 橫子間架天  
 十六挺子積

中三間半  
 右次生子  
 左次生子  
 右次生子  
 中三間半  
 左次生子  
 右次生子  
 中三間半  
 左次生子  
 右次生子

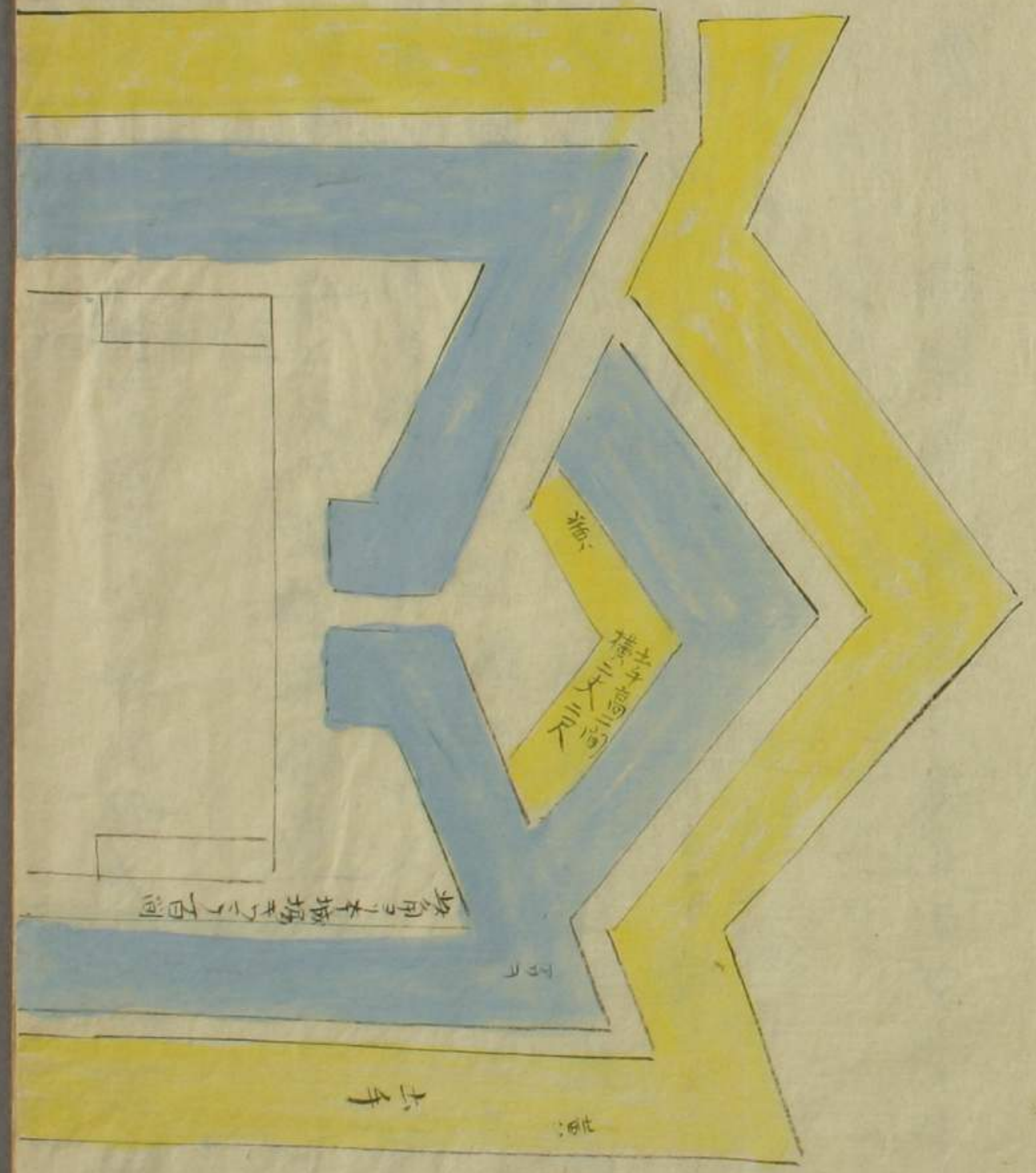
左次生子  
 右次生子  
 中三間半  
 左次生子  
 右次生子  
 中三間半  
 左次生子  
 右次生子

左次生子  
 右次生子  
 中三間半

左次生子  
 右次生子  
 中三間半

左次生子  
 右次生子  
 中三間半

- 一 城内サシ口タニ百八十四間
- 一 本城石火箭臺外ノ廣サ四十八間横矢折十六間
- 一 郭兩外形ノ間七十二間横廿二間
- 一 石垣高サ四間
- 一 石垣ノ上土手ノ高サ六尺横一丈五尺
- 一 腰郭武者走幅二丈五尺
- 一 腰郭土手ノ高サ六尺幅一丈五尺
- 一 堀幅十六間深サ地形ヨリ二間



慶安三庚寅年南蛮之異人由里安年者  
軍術ニ長スルヲ以

召ニ應メ本都ニ來リ客館ニ淹留スルヲ三  
歳長崎ノ通支相從フ臣長奉

台命而問其說退朝ノ暇時々面話通支所  
譯國字ヲ用テ記之積テ小冊ヲ成ヌ乃繕  
寫以上進ス明君賢將人ヲ以テ語ヲ不棄  
搜索遐夷ニ及フ深謀遠慮遺漏ナキヲ可知  
焉而已

從五位下安房守平姓北條氏臣長 謹錄

連城

藏本